



トピックス性のある活動をされている看護職の方をご紹介します。
長年の臨床実践や、結婚後の離職中に頼まれた付添看護婦の仕事、
そして再就職して看護部長まで務めた管理経験——その豊かなキャリアを
活かし、メッセンジャーナース認定協会会長に就任した吉田和子さん。
より近しく患者に寄り添う、セカンドキャリアの展望を伺いました。



一人ひとりに、寄り添い、
患者自身の選択をサポート

吉田 和子さん ——メッセンジャーナース認定協会会長

東京・大久保のビルの一室。「はい、そこは患者さんになりきりましょ
う！」「それじゃ、質問攻めになってないかしら」と温かくも厳しい指摘が飛
ぶ。看護コンサルタント(株)が主催するメッセンジャーナース研鑽セミナ
ーのロールプレイングの一コマだ。声の主は吉田和子さん。同社の一事業と
して、2010年10月に設立されたメッセンジャーナース認定協会会長である。
メッセンジャーナース構想は、同社代表取締役で開業ナースの草分けである
村松静子さんが発案、呼びかけに応えた吉田さん等と構築してきたもの。
「看護部長退職後、周囲の方たちから医療についてさまざまな相談を受ける
ようになりました。対話の中で、わからぬまま事が進むことへの相談者の不
安を強く感じ、何かできればと思っていた矢先、以前から意気投合していた
村松さんから連絡があったのです」と吉田さん。一も二もなく話に乗った。

メッセンジャーナースとは、「医療の受け手が自分らしい生を全うする治
療・生き方の選択を迫られた時に、医療の受け手に生じる心理的内面の葛藤
をそのまま認め、医療の担い手との認識のズレを正す対話を重視し、医療の
受け手自ら選択・納得に至るまでの架け橋になる看護師」(同協会ホームペ

よしだ かずこ ● 1967年武蔵野赤十字高等看護学院卒業後、武蔵野赤十字病院に入職し、小児看護に4年間従事。その後、神奈川県立こども医療センターにて4年間勤務後、結婚退職。離職中に、個人的に依頼を受けて付添看護婦を経験。出産後、武蔵野赤十字看護短期大学に事務職として勤務し、さらに武蔵野赤十字病院に再就職し、外来・病棟にて成人看護全般を担当。1996年秦野赤十字病院に異動、看護部長として2004年退職、現在に至る。

ージ <http://www.nursejapan.com/messenger/>) のこと。患者の相談を受け、必要ならば患者の通院に同行もする。そもそも患者と医療者には、それぞれの立場があり価値基準がある。その違い、あるいは説明不足から、認識のズレや気持ちのすれ違いが生じやすい。そのズレを対話の中から探り出し、調整しつつ、患者が納得して治療や生き方を選べるように支援するのがメッセージナーズの役割だ。では、具体的な活動内容はどのようなものなのか？

“対話”で重要なのは、相手が“傾聴されていると感じる”こと

「多くの患者さんには、“医者に説明されたがわからない”“このつらさをわかってほしい”等の思いがあります。まずはお話をじっくり伺い、“そうですね”“それはつらかったですね”と思いをよく聴き、受け止めることです。“傾聴”とよく言いますが、大切なのは、こちらが“傾聴していること”を相手に感じてもらうこと。つまり患者さんに、“ああ、この人は私の話を聴いてくれている、話しても大丈夫そう”と思ってもらえることなのです。臨床の場においては聴取することに捕らわれるあまり、やり取りが尋問のようになってしまう場合も多いですね」と吉田さん。

そのような対話を重ね、思いを十分に出し切ると、患者は自分のことや病気のことで、今後の治療や生活のことに向き合い、考え始める。「医療者から見て、いわゆる“問題のある”患者さんというのは、病気になって、つらい思いや感情的なことで頭がいっぱいになっています。そんな時に理路整然と治療や今後のことを話されても、入る余地がない。医療者が“説明した”つもりでも、患者さんの認識とのズレが生じるのはそのためなのです」

「例えば、転院を拒否されていたある患者さんにお会いし、今の気持ちや、拒否する理由を少しずつ伺っていく中で、患者さんがポロッと“ああ、そろそろ転院のことも考えなくちゃなあ”とおっしゃった。自分の思いを出せたことで、自分から現実に向き合うという、次のステップに進まれた訳です」

一方、自分自身も看護師だから、医療者の立場はよくわかる。「医療者が悪いとか間違っている、ということではありません。医療者も患者のために必要であり、大事なことと思ひ話しています。ただ、患者の思いを受け止め



取材当日、初のメッセンジャーナース2名が誕生した。認定証を手渡す吉田さん。



吉田さんは研鑽セミナー講師も務める。テーマは「時の流れ メッセンジャー力を磨こう！」

ずに話していることも。その思いを、医療者にさり気なく知らせたり、患者さんやご家族にアプローチのコツをお話しし、医療者が伝えたいことを引き出せるようにしたり、という役目もあるかと思います」

取り組みは、一人ひとりの現場から始める

メッセンジャーナースになるには、研鑽セミナー修了後、認定審査を受審するのが基本的な流れだ。受審要件は臨床経験10年以上、資格は3年ごとに更新される。研鑽セミナーは先行してスタートしていたため、2010年11月に認定者6名が誕生した。「今、認定者やセミナー受講者は現在の職場等で活動を始めています。また、2011年早々には認定者が中心となって、いくつかの地域で『市民講座』を開催予定です。それに伴って近い将来、病院や福祉施設等、また地域住民から求められる活動を、と期待しています。そのためには、多くの地域で活動できるメッセンジャーナースを着実に増やしていきたい」と吉田さん。また、『『夢株』の名称で、一口単位でメッセンジャーナースの活動を支援していただく仕組みも検討中』とのこと。1都5県で中心となるメッセンジャーナースが動き始めた今、彼らにとっても拠りどころとなる協会を目指している。K

(文責／編集部・古山 恵里)

吉田和子さんの“心に残る患者さん”

看護係長(主任)時代に出会った、末期がん患者のAさんは、管理職にあり、独特の皮肉っぽい口調でマネジメントの極意を教えてくださいました。ご家族から「告知しないで」と言われ、また時代もそういう時代。最期に「よおく、だましてくれたなあ」と穏やかにおっしゃった。それが、感謝なのか皮肉なのか、知りたかったのか、知りたくなかったのか、未だに答は出ていません。Aさんからの、一生かかる宿題だと思っています。

